

廃棄物処理という仕事



(公財) 日本産業廃棄物処理振興センター 監事

佐々木 五郎

Sasaki Goro

1970年4月横浜市役所採用。その後、横浜市道路局道路部路政課長、財政局管財部次長、道路局次長、経済局部長、総務局渉外部長、教育委員会事務局総務部長、市民局人権担当理事、環境事業局長、資源循環局長を歴任し、2007年3月に退職。同年4月から2017年6月まで(公社)全国都市清掃会議専務理事。現在(公財)日本産業廃棄物処理振興センター監事。

廃棄物処理という汚い仕事、人の嫌がる仕事等と、とかく敬遠される仕事の代名詞とされてきた。かつては、廃棄物処理に携わる人の職業が蔑視される事例が多くみられ、そのために自分の行っている廃棄物処理の仕事を人前で言えない等、辛い、悲しい、悔しい思いをしたことがある人も多い。ゴミというのは自分が出しているのに自分の手元から離れてしまうと二度と触れたくない汚いものになってしまい、自分ではやらずに人任せにしてしまうのである。このような気持ちを多くの人が持っている。現在では、廃棄物処理は環境保全や循環型社会のために重要な仕事として社会的に認知されている筈なのであるが、廃棄物処理に関わるマイナスイメージは、依然として残っているのではない。

廃棄物処理については、循環型社会を実現するためには必要不可欠な重要な仕事であり、正に市民生活や企業活動にとって一日も欠かすことのできない、なくてはならない仕事である。廃棄物は今やごみではなく循環資源として位置づけられ、廃棄物処理は、環境ビジネスとして展開されており、近年では循環社会の形成に向け将来性のあるものとされている。その核となる廃棄物処理施設は住民にとっては嫌悪施設、迷惑施設である。その建設に際しては、公立の施設であろうが、民間の施設であろうが、近隣の

住民の理解と協力を得る事が不可欠であり、そのためには大変なエネルギーを必要とする。真摯に住民に向き合い、事業内容や施設の必要性、データ等を丁寧に説明する必要がある。建設後の運営に関しても近隣住民に参加してもらおうとか積極的な施設見学会の開催、定期的なデータの公表等により、住民の理解と協力を得て、地域に開かれた施設となり、成功している事例もある。要は包み隠さずにきちんと見せて理解してもらおう事である。そこから協力が始まる。

廃棄物処理を行う自治体、業界団体や個々の企業においては、廃棄物処理に携わる職員向けの研修を行ない、コンプライアンスの徹底やモラルの向上に努力している。以前、廃棄物処理において、「悪貨は良貨を駆逐する」といわれ沢山の不適切な事例があったが、近年では適正処理や環境保全を踏まえた循環型社会の実現に向けて関係者の取り組みが進んでいる。電子マニフェストの普及や優良な処理業者の増加はその変化の表れだと思う。

収集運搬の現場でも、何でもまとめて運べば良いというやり方から分別収集が当たり前のやり方に変わり、廃棄物処理を行う者とごみを排出する者との連携協力が進んでいる。

廃棄物処理という仕事も着実に良い方向に向かっていると確信している。